

V. ウルフの『幕間』

住本哲子

Between the Acts

By

Akiko SUMIMOTO

1

ウルフ (Virginia Woolf) の死後、出版された *Between the Acts* (1941) はウルフが自殺する約1ヶ月前に完成した最後の作品である。¹⁾ ウルフの夫、レナード・ウルフ (Leonard Woolf) がこの作品の巻頭で述べているように、ウルフは多分最終決定稿に至るまでには改訂の筆を加えたであろうと思われる。ウルフが *Between the Acts* の執筆を思い立ったのが1938年4月であり、脱稿したのは1941年2月である。最初題名は *Pointz Hall* (1938.4.26)²⁾ であったが、*The Pageant* (1940.11.23)³⁾ と改題され、その後最終的に *Between the Acts* (1941.2.26)⁴⁾ となった。

日記 (1938.4.26) の中で、ウルフはこの作品の構想を語っている。

…but “I” rejected : “We” substituted : to whom at the end there shall be an invocation? “We” … the composed of many different things … we all life, all art, all waifs and strays — a rambling capricious but somehow unified whole — the present state of my mind? And English country; and a scenic old house…⁵⁾

イギリスの田園地方にある古い邸 — ポインツ・ホール (Pointz Hall) — がこの作品の舞台となっている。だがこの時はまだページェントのことに関する言及はなされていない。数年前から書き始めていた *Roger Fry* (1940) よりも *Between the Acts* の方が筆の運びが早かったようである。日記 (1938.12.19)⁶⁾ の中でウルフは、既に120頁書き終ったと述べている。220頁の長さの予定なので全体の半分余り書いたことになる。しかし、1939年に第2次大戦が勃発してからは、戦争の恐怖に悩まされる毎日が続く。日記をみると激しい空襲⁷⁾ におびえ、迫って来る死の影から必死に逃げようとするウルフの姿が克明に示されている。次の日記 (1940.6.24) は戦争という歴史的危機をウルフがどのように捉えているかを示している。

All the walls, the protecting and reflecting walls, wear so terribly thin in this war. There's no standard to write for : no public to echo back ; even the “tradition” has become transparent.⁸⁾

戦争の最中に創作活動続けることは、ウルフにとって堪え難い苦しみだったに違いない。

Between the Acts は、幻滅と崩壊の時代に生きたウルフの最後の苦闘の結実であった。

2

Between the Acts はイギリスの田園地方のある村を舞台として、1939年6月のある日の前夜からその日の夜までの約24時間の中に展開される。この村の古い邸、ポインツ・ホールの庭で毎年ページェントが行われる。このポインツ・ホールの所有者であるオリバー (Oliver) と妹のスウィジン夫人 (Mrs. Swithin)。オリバー老人の息子のジャイルズ (Giles) と彼の妻アイザ (Isa) と二人の子供。ページェントに出演する村の人達。それから突然訪れたマンリーザ夫人 (Mrs. Manresa) とウィリアム・ドッジ (William Dodge)。ページェントの作者であるラ・トロウブ女史 (Miss La Trobe)。以上が主な登場人物である。

スウィジン夫人は、*An Outline of History* を愛読している。彼女は合理主義的な兄とは対照的な性格で、この本を読んでは太古の昔のことについて空想する。例えば、ロンドンのピカディリーはしゃくなげの森であり、そこには巨獣が住んでおり、⁹⁾ またイギリス本土と大陸は地つづきになっている有史以前の宇宙を夢想したりするのである。Margaret Church はこのスウィジン夫人こそ、*Between the Acts* の中心人物であり、¹⁰⁾ ‘It is she who is the link between Miss La Trobe’s play and the actual life of the village …’ であると述べている。確かにスウィジン夫人は *The Years* (1937) のエリナ (Eleanor) を思い起させるような女性であるが、ここでは更に一層興味をひくページェントについて考えてみたい。

A child new born
Sprung from the sea
Whose billows blown by mighty storm
Cut off from France and Germany
This isle.¹¹⁾

このプロローグに始まったページェントは、チャーサーの時代となり、次にエリザベス女王時代となる。そして18世紀、19世紀を経て、最後は現代となっている。この現代でページェントの作者、ラ・トロウブ女史は観客の前に鏡を示すのである。動揺する観客の耳に、かん木の間から声が聞えて来る。

Look at ourselves, ladies and gentlemen ! Then at the wall ; and ask how’s this wall, the great wall, which we call, perhaps miscall, civilization, to be built by … orts, scraps and fragments like ourselves ?¹²⁾

混乱と崩壊の現代に生きる我々は、‘orts, scraps and fragments’ であり、また現代文明もしかりである。これは1940年6月24日の日記にみられるウルフの絶望的現実認識と全く同じものといえよう。ページェントが象徴している時は1939年6月であった。

それではこのページェントの意味は一体何であろうか。何を伝えようとしているのだろうか。ストリートフィールド牧師 (the Rev. G. W. Streatfield) は自分の解釈を述べる。‘We acts different parts; but are the same.’¹³⁾ なのであり、‘Each is part of the whole.’¹⁴⁾ である。‘scraps, orts and fragments’ にすぎない我々も ‘unite’ されるとストリートフィールド

ド牧師は感じたのである。スウィジン夫人の直観的認識は、ストリートフィールド牧師の場合よりも明確なものとなっている。スウィジン夫人は十字架をさわりながら、‘a circular tour of the imagination—one-making’¹⁶⁾へと入って行く。彼女にとって、この時、時間は存在しない。

Sheep, cows, grass, trees, ourselves — all are one....we reach the conclusion that *all* is harmony, could we hear it. And we shall.¹⁷⁾

すべてのものが一体となり、すべてのものは調和し融合するのである。これがスウィジン夫人の得たヴィジョンであった。ラ・トロウブ女史がこのページェントで意図したことも、すべてのものを統合し一体化することであったと思われる。ラ・トロウブ女史は観客もページェントの出演者も帰った後、ひとり静かにページェントの成否を考える。

... You have taken my gift ! Glory possessed her — for one moment. But what had she given ? ... It was in the giving that the triumph was.¹⁸⁾ And the triumph faded. Her gift meant nothing.

ラ・トロウブ女史の捉えたヴィジョンは一瞬のものにすぎない。次の瞬間には消え去ってしまう。それゆえにラ・トロウブ女史はページェントに対しても確信が持てないのである。ラブ (Jean O. Love) が、‘She is not sure of the pageant’s meaning but seems to have had some transcendent vision for it.’¹⁹⁾と指摘しているのはラ・トロウブ女史の曖昧な態度を説明しようとしたと考えられる。

3

Between the Acts の評価はさまざまである。ベネット (Joan Bennett) のように、*Mrs. Dalloway* (1925) , *To the Lighthouse* (1927) , *The Waves* (1931) と同列において評価し四大傑作であるとみる批評家もあれば、*Between the Acts* は失敗作だとみる批評家もある。デイシス (David Daiches) は、‘The book is a lyrical tragedy whose hero is England.’²¹⁾であると述べている。戦争の最中に書かれたこの作品は、他のどの作品よりも悲劇的色彩が濃いように思われる。そして *Between the Acts* という題名はきわめて象徴的であり、それはページェントの幕間に演ぜられる人々の心理的葛藤をさすと共に、二大戦間の幕間をも指示していると思われる。

参 考 文 献

- 1) V. Woolf, *A Writer’s Diary* (London, 1959), p. 365.
- 2) *Ibid.*, pp. 289-290.
- 3) *Ibid.*, p. 359.
- 4) *Ibid.*, p. 365.
- 5) *Ibid.*, pp. 289-290.
- 6) *Ibid.*, p. 309.
- 7) Cf. *A Writer’s Diary*, pp. 335, 354.

- 8) *A Writer's Diary*, p. 339.
- 9) Cf. V. Woolf, *Between the Acts* (London, 1960), pp. 13-14.
- 10) Margaret Church, *Time and Reality: Studies in Contemporary Fiction* (The University of North Carolina Press, 1963), p. 72.
- 11) *Between the Acts*, p. 95.
- 12) *Ibid.*, p. 219.
- 13) *Ibid.*, p. 224.
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*, p. 225.
- 16) *Ibid.*, p. 204.
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, p. 244.
- 19) Jean O. Love, *World in Consciousness: Mythopoetic Thought in the Novels of Virginia Woolf* (University of California Press, 1970), p. 234.
- 20) Joan Bennett, *Virginia Woolf: Her Art as a Novelist* (Cambridge U. P., 1964), p. 98.
- 21) David Daiches, *Virginia Woolf* (Norfolk, 1963), p. 121.